

岡垣の教育 岡垣東中学校⑨

—創立10周年ころまで—

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

秋は「文化の秋」とか「読書の秋」とも言われているが、初冬を迎えようとしている。

東中創立9年次の校友会誌「やはぎ」第5号には、詩や俳句、読書感想文などが紹介されている。その中から、読書感想文一つの要約を紹介する。読書に相当関心のある生徒だと思った。

【「アンネの日記」を読んで】

(1年 森田良子さん)

「第二次世界大戦下、決まった国をもっていなかったユダヤ人たちは、ドイツ軍に捕らえられ、次々と収容所に送り込まれた。アンネもその一人だった。狭い隠れ家で、少しの物音にもおびえて、毎日を送らねばならなかった。何度となく絶望に打ちひしがれながらも、希望を失わなかった。

アンネたちは勇気があると思うが、それよりも勇気があったのは、アンネたちをかくまってくれた人だと思う。自分のことだけで精一杯だという時代に、人を助けるな

んて、心の広い人だなと思った。

希望を捨てなかったアンネたちだったが、とうとう収容所へ送られた。そこは、地獄と呼ぶのにふさわしい所だった。飢えと寒さで、毎日、数えきれないくらいの人たちが死んでいった。弱って動けなくなった人々は、ガス室で焼かれたという。人体実験に使われた人たちもいたという。そんなつらい中、アンネは息を引き取った。あれほど切望していた平和を待たずに。

この本は、私に生きることの苦しさや戦争の恐ろしさを教えてくれた。私には戦争が怖いものだと分かっていても、それがどれほどものか、真に理解できません。戦争というものが残した大きな傷跡を見て、もう2度とこのような残酷なことが起こらないようにすること、これが私たちの使命だと思う。」と書かれている。

筆者は、2016年5月末、「ポーランドとバルト3国」のツアーに参加した。目的の一つは、

第二次世界大戦中、ポーランドにあったアウシュビッツ収容所跡を見学できるからである。

アンネ一家(4人)は、ユダヤ人だった。1942年7月、ナチスの目から逃れるために、アムステルダム(オランダ)の古い建物の一隅に隠れての生活が始まった。それから約2年間アンネが書いたのが「アンネの日記」である。しかし、1944年8月、隠れ家が発覚して、アンネ一家はアウシュビッツ収容所に送られた。しばらくして、母親が亡くなった。

同年10月末、アンネと姉のマルゴットは、ドイツのベルゲン・ベルゼン収容所へ移送された。翌年の2月、姉がチフス病にかかり、亡くなった。3日後に、生きる希望を失ったアンネも静かに息を引き取ったという。

父親はアウシュビッツ収容所で解放され、生還できた。その後、アンネの書いた日記や童話などの



▲13歳のアンネ。日記を書き始めたころ。「アンネの日記」(文芸春秋社刊)から援用

出版に携わった。

アウシュビッツ収容所跡地は1979年に世界遺産となり、現在はアウシュビッツ博物館になっている。こと近くのアウシュビッツ第2収容所といわれる「ビルケナウ収容所跡」を、日本人ガイドの中谷剛氏(ポーランド在住で博物館の公式ガイド)に案内してもらった。

見学しながら、こんな悲劇を繰り返してはならぬと思った。森田さんの感想文を読みながら、アウシュビッツのことを思い出した。